

「コサック神話」とショールホフ『静かなドン』 ——二重に解体されるコサック——

西谷 友登

序論

ミハイル・ショールホフ(Михаил Александрович Шолохов, 1905-1984)の長編小説『静かなドン』(Тихий Дон, 1928-1940)は、第一次世界大戦、ロシア革命、そして内戦という激動の時代における、ドン・コサックの生活とその変容を描いた作品である。この小説は、社会主義リアリズムの古典として高く評価される一方で、ソ連の公式文学としては特異な作品でもある。『静かなドン』は1928年から12年にわたり断続的に発表されたが、1940年の小説完結時には、ソビエト批評界に大論争を巻き起こした。特に論争の焦点となったのは、主人公のグリゴリー・メレホフが革命に同化することなく破滅するという結末をめぐる問題であった。

『静かなドン』には膨大な先行研究が存在するが、その多くは社会主義リアリズムの規範や政治的なイデオロギーの観点から小説を分析するか、そうでなければ「真実」や「悲劇」といった普遍的なテーマから作品の意義を問う抽象的なアプローチに偏っていた。しかしながら、この作品にはそれだけでは捉えきれない複雑さが存在する。そこで本稿は、『静かなドン』を、アメリカのロシア思想・文学研究者コーンブラットによって提唱された概念である「コサック神話」の観点から分析し、新たな解釈を提示することを目指す。

第1部 問題意識と方法

1. 『静かなドン』の先行研究

1.1. 1940～1960年代ソ連の批評

ロシアの文学研究者スヒフは、自身の包括的な『静かなドン』論の中で、ソビエトにおける『静かなドン』批評の歴史を概観し、これまで提示されてきた、主にグリゴリーの運命をめぐる諸解釈を年代別に整理している。¹ まずはスヒフに依拠しながら、各年代の代表的な批評を確認しよう。

小説完結直後の1940年代に主流となった解釈を、スヒフは「離反」概念(концепция «отщепенства»)と呼んでいる。ここに属する論者は、グリゴリー・メレホフを革命の離反者とみなし、彼の運命の悲劇性を否定するような立場をとる。そこでは、グリゴリーと彼の属する中農コサックという階級の中にプチブル的要素とプロレタリア的要素の対立が見出され、小説においては後者の最終的な勝利が描かれているものの、グリゴリーは結末においてそこから個人的に逸脱し

¹ Сухих С. И. «Тихий Дон» М. Шолохова. Лекции по спецкурсу. Нижний Новгород: ООО «Типография «Поволжье», 2006. С. 11-132.

てしまったのだと主張される。「[グリゴリーの]悲劇的な運命の最終的な原因は、主人公の間違った選択の偶然性、主観的な気まぐれ、個人的な過ちである」。²

実際、この時期の代表的批評家エルミーロフは、グリゴリーが第 8 部において「小説の先行する部によってわれわれが知っているグリゴリーと違う、別個の人間」になってしまったと指摘している。³

第 8 部において、グリゴリー・メレホフは社会的、芸術的に新しい形質を獲得し、離反の道に踏み出し、完全な荒廃へと達していく。この荒廃に至るメレホフの道は悲劇的である。しかし、そこに到達した後の彼は、悲劇的主人公あるいは悲劇的犠牲者であることをやめる。グリゴリーは大きな魅力、誠実さ、勇敢さ、強さを持ち、「主人たち」に騙された労働者だった——これが彼に悲劇の権利を与えていた。荒廃と離反は、彼からこの権利を奪う。⁴

このようなアプローチは、『静かなドン』の結末を社会主義リアリズムの規範に適合させるための試行錯誤から生まれたものである。⁵ 現代の視点から見れば、主人公のグリゴリーを小説全体の主題から切り離す読解は、もちろん奇妙に映る。スヒフも「離反」概念を「**通俗的な社会学** (вульгарно-социологический)」⁶ と呼んで批判するが、「それでも「離反」概念は、グリゴリー・メレホフの人格と運命の**例外性**、非凡さ、個人性に注意を向けた」⁷ として、部分的な意義は認めている。

続いてスヒフは、50 年代には「歴史的誤謬」概念(концепция «исторического заблуждения»)が注目されたとする。ただ、この概念そのものは文芸評論家エメリヤーノフが 1940 年の時点で提示していたものである。エメリヤーノフの『「静かなドン」とその批評家たちについて』(«Тихий Дон» и его критики, 1940)はエルミーロフら数名の批評家を名指した論争的文章であり、それ以前の批評とエメリヤーノフの差異が明確に示されている。そこで、ここではエメリヤーノフの文章そのものを追うことにしよう。批評は、『静かなドン』の悲劇性に関するそれまでの解釈への批判から始められる。

何人もの批評家は、プロレタリア革命の諸条件の下での中農コサック層の運命には客観的に解決不能な矛盾はない、という全く正しい命題から出発して、グリゴリーは悲劇的主人公で

² Там же. С. 32. 以下、本稿において引用中の太字は原文の強調を、下線は引用者による強調を表す。また、[]内は引用者による補足を、[.....]は省略を表す。

³ Ермилов В. В. О «Тихом Доне» и о трагедии // Литературная газета. 1940. № 43 (11 авг.). С. 3.

⁴ Там же. С. 4.

⁵ 平松潤奈は、1940 年の『静かなドン』完結が批評界にもたらした衝撃と、異例な結末を受け入れるために批評家たちによってなされた論争について詳述している。平松潤奈「寸断されたテキスト:『静かなドン』とソヴィエト文学体制の成立」東京大学大学院人文社会系研究科博士論文、2008 年、144-195 頁。

⁶ Сухих. «Тихий Дон» М. Шолохова. С. 37.

⁷ Там же. С. 38.

はなく、彼をそのようにとらえようとする試みはすべて歴史の歪曲であり虚構であると結論付けている。⁸

確かにエルミーロフは、小説全体としては革命が成就したにもかかわらず、グリゴリーは個人的な人格の荒廃によってそこから離脱し、「悲劇の資格」を失ったと述べていた。しかしエメリヤーノフは、批評家たちが「中農コサック」という類概念と個人的、具体的な人間の人格とを完全に同一視している」と指摘する。⁹「中農コサック」という「類」全体が革命の原理と矛盾していなくとも、そこに属する個人にとっての悲劇はありうる、というのがエメリヤーノフの主張である。

悲劇的なのは、起らないでもすんだこと、被抑圧階級に属していながら自らの解放という事業を妨げている個々人の誤謬によって生み出されたもののみである。自身の解放者たちへの敵対こそ最も恐ろしく真に悲劇的なものであり、これが国内戦当時に起り得たのである。それゆえにこそ、コサックの基本的大衆の「世界史的な誤謬」の結果であり、四年にわたって続いたドンにおけるコサックの反乱は、悲劇的作品のテーマになりうるのである。¹⁰

しかし、グリゴリーの悲劇的結末の原因をこのように「個々人の誤謬」として説明するのであれば、エメリヤーノフの主張は、グリゴリーの個人的な「離反」を主張したエルミーロフらとどのように異なるのだろうか。それは、彼がグリゴリーの人格的な弱さを否定するところにある。エメリヤーノフは断言する。「彼は優柔不断どころではなく、どのような場合にも力に満ちあふれ、情熱に燃えている」。¹¹しかし、「力に満ちあふれ、情熱に燃えている」からこそ、グリゴリーは革命期の中農コサックが抱えていた矛盾のすべてを体現してしまう。先に見たように、エルミーロフによれば、中農コサックの「個々人の誤謬」そのものはありふれたことだし、その原因となる階級的矛盾も、最終的には解決可能なものだった。「しかし」とエメリヤーノフは言う。「コサックの反乱における彼の役割、彼がかつて犯した罪はあまりにも大きく、グリゴリーはその過去に対する、すなわち「悲劇的過失」に対する返報を受けるのである」。¹²

以上の論点を整理すると、エルミーロフら「離反」論者は、中農コサックの一般的な運命からのグリゴリーの逸脱をもって彼の悲劇的主人公としての資格を否定したのに対し、「歴史的誤謬」の立

⁸ エメリヤーノフ／伊東一郎訳『「静かなるドン」とその批評家たちについて』、『筑摩世界文学大系 77:ショールホフII』筑摩書房、1973年、522頁。

⁹ 同前。

¹⁰ 同前、523頁。

¹¹ 同前、524頁。

¹² 同前、528頁。

場をとるエメリヤノフは、逆説的ではあるが、その逸脱を階級的矛盾の最も鋭い発現の帰結とみなすことで、グリゴリーの「典型」性と悲劇的価値を擁護したのだといえる。¹³

そしてスターリン以後の時代である 1960 年代になると、スヒフが「共感」概念(концепция «сочувствия»)と呼ぶ立場を取る論者が現れるようになった。彼らは、「グリゴリー・メレホフはわれわれの人間(наш человек)である」¹⁴ という前提から出発し、彼が最終的にボリシェヴィキと同一化できなかった原因を、彼自身の資質ではなく、テキスト内の事実を求めるというアプローチをとっている。グリゴリーが赤の陣営から離れるとき、テキストには確かにそのきっかけが記されている。例えば、彼が第 5 部で赤軍と決別したのは、赤軍指導者ポドチョールコフによる捕虜の虐殺に失望したからだだった。「[グリゴリーは]チェルネーツォフの死と、捕虜になった士官たちを裁判なしに銃殺したことを、許すことも忘れることもできなかった」(5:13;3:217)。¹⁵ グリゴリーが第 8 部で赤軍を除隊されたことにも、赤軍司令部が反乱軍士官の地位にあった彼を信用できなかったという事情があった。「俺は盲目じゃないから、コミッサールや騎兵中隊の共産主義者たちが俺をちらちら見ていたのが分かった」(8:7;4:280)。「共感」概念をとる論者たちは、このようなテキスト内の証拠を集めながら、グリゴリーが最終的に赤軍から追い出されてしまった原因を論じている。スヒフは、彼らのアプローチの利点について次のように述べている。

「共感」概念は、ショーロホフの小説において、主人公たちや革命と内戦の出来事への光の当てる方には一面性も偏向性もないこと、『静かなドン』においては「赤軍」の陣営も相対する「白軍」の陣営と同じように、先入観なく、客観的に、容赦なく光が当てられているのだ、ということをはっきりと示した。¹⁶

『静かなドン』が白軍やドン反乱軍だけでなく、当時の赤軍の過ちをも客観的に描いているのだという見方は、確かに小説に新たな解釈をもたらした。しかし、このような解釈には、グリゴリーを

¹³ ここでの「典型」という用語は、リアリズム文学に関してエンゲルスが提起した概念に端を発し、マレンコフが社会主義リアリズムの文脈の中で以下のように再定義したものを念頭に置いている。「われわれの芸術家、作家、美術の労働者は、芸術的形象の創作を伴うその創造的な仕事において、典型的なものとは、最も頻繁に遭遇するものであるのみならず、最大の完全さと鋭さにおいてその社会的集団の本質を表現するものなのだということを、常に覚えておかなければならない。マルクス・レーニン主義的理解においては、典型性とは決して何らかの統計的平均を意味するのではない。典型性はその社会史的現象の本質に対応するものであって、単なる最もよくある、頻繁に繰り返される日常性ではない。形象の意図的な誇張、強調は、典型性を排除するのではなく、それを最大限に暴露し、際立たせるのである」。Маленков Г. М. Отчетный доклад XIX Съезду Партии о работе Центрального комитета ВКП(б): 5 октября 1952 г. М.: Гос. изд-во полит. лит-ры, 1952. С. 115.

¹⁴ Сухих. «Тихий Дон» М. Шолохова. С. 71.

¹⁵ 本稿中『静かなドン』のテキストは以下から引用し、その和訳は本稿著者による。また、引用箇所は本文中に(部:章:巻:頁)の形式で表示する。Шолохов М. А. Собрание сочинений в девяти томах. Т. 1-4. М.: Терра, 2001.

¹⁶ Сухих. «Тихий Дон» М. Шолохова. С. 98.

革命における諸矛盾の被害者として位置づけてしまうことで、グリゴリーとその他の者たちの運命の間にある質的な差異について効果的に注目できないという欠点もあった。

1.2. 「非社会主義的」批評

前節で見たように、ソビエトの批評家たちは、その公式の創作手法である社会主義リアリズムの規範に照らして作品を論じなければならなかった。それでは、そのようなイデオロギー的制約を(直接的には)受けないソ連国外において、『静かなドン』はどのように解釈されたのだろうか。また、スヒフは、ソビエト批評界においても、既存のあらゆる批評を再考するような「新たな哲学的・美学的アプローチ」が、(60年代にすでに出現していたのだが)70～80年代に形成されたとしている。¹⁷ 本節では、これらの社会主義イデオロギーから離れた立場からの『静かなドン』批評をいくつか取り上げる。

まず、日本における受容を確認しよう。『静かなドン』の翻訳者である横田瑞穂は、「解説」として、この小説の教訓を「[……]人民から離れ去り、自分だけの小さな幸福をもとめる人間は破滅に運命づけられる、完全な精神的荒廃に運命づけられるということである」とまとめている。¹⁸ これは先に見た、エルミーロフらの「離反」の議論と近い見解のようだ。また、ロシア文学者の小野理子は、「[……]この小説の悲劇性は、グリゴリーが他の多くの反動的コサックと同じ転落の道をたどりつつ、彼らとは違う覚めた眼を持っていたこと——正義は自分にはないことをはっきりと自覚していた点にこそあるのではないだろうか」と述べている。¹⁹ 小野はグリゴリーを「正義は自分にはないこと」を自覚している点で傑出した人物とみなすが、その運命は基本的に「多くの反動的コサックと同じ」としており、他のコサックたちと異なる意義を持つものとしては考察していない。

一方、亡命ロシア人の文学研究者エルモラーエフは、レフ・トルストイ(Лев Николаевич Толстой, 1828-1910)の『戦争と平和』(Война и мир, 1865-1869)との比較において、『静かなドン』においては作者の思想が明確に示されないとしながら、次のように述べている。「『静かなドン』が本質的にしていることは、広大な人生という川をそれが流れるままに提示することであり、人間存在の複雑さについての自らの推論を引き出すことは読者に委ねられている」。²⁰

最後に、スヒフが「哲学的・美学的アプローチ」の代表的論者に数えるロシアの批評家パリエーフスキーは、この小説を「真実をめぐる闘争」と規定したうえで、「われわれの時代の意味について考えるための本として、『静かなドン』よりもふさわしいものはおそらく存在しないだろう」と評価して

¹⁷ Там же. С. 101.

¹⁸ 横田瑞穂「解説」、ショーロホフ／横田瑞穂訳『静かなドン』8、岩波文庫、1959年、452頁。

¹⁹ 小野理子「メーレホフは果して他人か：『静かなドン』にみる作者と主人公」『ロシア語ロシア文学研究』6号、1974年、68頁。

²⁰ Herman Ermolaev, *Mikhail Sholokhov and His Art*, Princeton: Princeton University Press, 1982, p. 90.

いる。²¹ パリエーフスキーによると、ショーロホフは、様々な立場の人物が自らの「真実」を追求する様子を描きながらも、「普遍的な真実(общая правда)」の存在を伝えてもいるのだという。²²

これらの見解は、横田のものを除くと、社会主義リアリズムという規範から離れて、『静かなドン』をより客観的に解釈しようとするものである。しかしながら、これらの試みは、ソビエトの批評家たちにおいて評価の軸足でもあった社会主義リアリズムの規範なしに、小説を一般的な文脈において見ようとすることで、かえってその読解が抽象的・印象論的なレベルに留まっている、ということも指摘できるだろう。

これまで見てきたような『静かなドン』の批評は、いずれも利点と同時に欠点を抱えていた。これらに共通する欠点を挙げるならば、それはグリゴリーの特異な運命をうまく説明できない、ということになるだろう。このような現状を踏まえて、本稿は、コーンブラットが自身の著書で提唱した「コサック神話」という概念に注目する。コーンブラットはこの概念を用いて、『静かなドン』を含むロシア文学におけるコサックのイメージを、通時的に分析している。確かに、『静かなドン』は、まさにコサックを描いた小説でありながら、コサックのイメージという観点から論じられることは少なかった。しかし、第2部で明らかになるように、『静かなドン』は多分に「コサック神話」に立脚して成立している。グリゴリーの特異な運命についても、彼を「コサック神話」的な主人公として考えることで、見えてくるものがあるだろう。

2. 「コサック神話」とは何か

2.1. 「自然化」されたイメージ

コーンブラットは、ギャロップで駆け、略奪・強姦をし、トルコ人の村やポーランドの教会を焼き払う……といったコサックのイメージを列挙したうえで、『戦争と平和』においてトルストイがナターシャを「コサック」と呼ぶとき、そのあだ名の意味がそれ以上の説明なしで了解される、つまり「エピソードは自然化(naturalized)されていた」と指摘する。²³ このように、文学上の「コサック」に付与され、自然なものとして捉えられるに至ったある種のメッセージというのが、コーンブラットにおける「コサック神話」の基本的な意味である。

コーンブラットは、ロラン・バルト(Roland Barthes, 1915-1980)の用語を用いながら「コサック神話」

²¹ Палиевский П. В. «Тихий Дон» М. А. Шолохова // Мир Шолохова. 2015. № 2(4). С. 65. ただし、当該論考の本文末尾の記載によると、これは1980年に執筆されたものである。

²² 「しかしながら、そのような確信を持って、一人一人に以下のことを促した芸術家はこれまでいなかった。すなわち、自分の頭を越えて物事を見ること、そして自分の頭が世界で唯一のものではないこと、つまり理解すべき普遍的な真実が存在すると認めることである。そして、彼はそれを最も優れた仕方伝えることができるのだ」。

Палиевский. «Тихий Дон» М. А. Шолохова. С. 65.

²³ Judith Deutsch Kornblatt, *The Cossack Hero in Russian Literature: A Study in Cultural Mythology*, Madison: The University of Wisconsin Press, 1992, p. 3.

の分析を行っているが、政治性という点では、バルトとは異なる態度を表明している。「私は文化的
神話が国民意識を制御する究極的な力をはっきり認識しているが、私の見方はバルトのそれより
も政治的ではない」。²⁴ コーンブラットは、ロシアにおける「コサック神話」の類例としてアメリカ合衆
国における「フロンティア神話」を挙げ、このような神話が、しばしば歴史的証拠と矛盾する形で、現
実の人々の自己意識を規定する力を持っていることを指摘している。が、バルトのようにそれをこ
とさらに攻撃対象とはしていない。コーンブラットは、「ここでの私の企ての一部は、神話を「脱自然
化(denaturalizing)」してその力を取り上げるということになるだろう」としつつも、神話分析の意義を
次のように拡張している。

さらに、われわれは研究の対象を第二の体系、つまりロシア文学におけるコサック神話の意図
的な利用へと拡大することができる。神話は人々の自己意識に受動的に埋め込まれている。し
かし、神話的イメージの力に自覚的な個々の作家たちは、神話の構造を能動的に操作し、とき
にはそれを解体してしまうこともできるのだ。²⁵

実際に、文学における神話に対してこのような立場を取るコーンブラットの研究は、アレクサンド
ル・プーシキン(Александр Сергеевич Пушкин, 1799-1837)からウラジーミル・ナボコフ(Владимир
Владимирович Набоков, 1899-1977)に至るまでの個々の作家の作品を分析して、それらにおける
コサックのイメージを抽出し、その通時的な変化、あるいは作家たちによる改変の過程を追うもの
になっている。そしてそこから、(後に見るように)19世紀中葉に完成した「コサック神話」が、20世紀
の社会主義リアリズムにおいて死を迎えたという「コサック神話」史観が引き出されている。その中
で、コーンブラットは、「ショーロホフはコサック神話にとどめを刺すことはできなかった」²⁶ としなが
らも、それに「壊滅的打撃(deathblows)」を与えた作品として『静かなドン』を位置付けている。²⁷

2.2. 本稿の立場:「脱自然化」の文学的效果

本稿で導入される「コサック神話」の概念も、基本的にはコーンブラットの路線を推し進めたもの
になっている。バルトや、部分的にコーンブラットが目指したような、神話そのものの「脱自然化」、
すなわち「コサック神話」の恣意性の暴露についてはここでは行わない。また本稿は、コーンブラ
ットのように、「コサック神話」の盛衰の歴史を考え、その中に『静かなドン』を位置付けようという志向
も持たない。

²⁴ Kornblatt, *The Cossack Hero in Russian Literature*, p. 179.

²⁵ *Ibid.*, p. 4.

²⁶ *Ibid.*, p. 162.

²⁷ *Ibid.*, p. 149.

代わりに注目するのは、『静かなドン』における「コサック神話」の利用の仕方と、それが改変あるいは解体されるときに生じている文学的な効果である。文学作品において、神話はその自然化の作用によって一定の固定されたイメージを伝える。しかし、それと同時に、作家は神話を様々な仕方です「脱自然化」しながら、その効果を芸術的に利用してきた。例えば、バルトはギュスターヴ・フロベール(Gustave Flaubert, 1821-1880)の長編小説『ブヴァールとペキュシェ』(Bouvard et Pécuchet, 1881)をそのような作品の典型とみなしているが、そこではブルジョワ階層の神話的な言葉が徹底的に再神話化されることで、「人工的な神話体系」が作り出されているという。²⁸

本稿の見立てでは、「コサック神話」と『静かなドン』の関係は、この種の最たる例の一つである。第2部で論じるように、『静かなドン』において「コサック神話」は人物形象において様々な改変されており、しかも小説の結末では「コサック神話」の最終的な解体が行われるからである。そして、この分析を通して『静かなドン』そのものの解釈を試みるというのが本稿の趣旨である。

3. 19世紀までの「コサック神話」

コーンブラットは、プーシキンやその同時代作家のロマン主義的な作品によって歴史的なコサックが神話的英雄に変化し始め、²⁹ そしてそのイメージはニコライ・ゴーゴリ(Николай Васильевич Гоголь, 1809-1852)の時代に完成を見たと考えている。コーンブラットは述べている。「コサックの完全な神話というのはどの単一のテキストに見出せるものでもないが、ゴーゴリの『タラス・ブーリバ』は[……]おそらく最も近いものになるだろう」。³⁰ ここで、コーンブラットが『タラス・ブーリバ』(Тарас Бульба, 1842)³¹ を頂点とするゴーゴリのコサック像に見出している諸要素は、「ロシア化」「歌と踊り」「女性の不在」といった概念でまとめることができる。ただし、これらのうち「歌と踊り」のモチーフは、ゴーゴリが「コサックの活動のメタファーとしてしばしば用いている」³² ものであり、『静かなドン』にも影響を与えているのだが、それ以前の作品ではそれほど前景化していなかった。そのため、「歌と踊り」については本稿第2部で行う『静かなドン』の分析において簡単に触れるにとどめて、本章では「ロシア化」と「女性の不在」に焦点を当てて、コーンブラットの議論と個々の作品テキストを参照しながら、「コサック神話」の特徴を概観しよう。さらに、コーンブラットの射程には入っていないものの、本稿が「コサック神話」を考えるうえで必要だと考える他の要素もここで指摘しておく。

²⁸ ロラン・バルト／下澤和義訳『現代社会の神話：1957(ロラン・バルト著作集3)』みすず書房、2005年、352頁。

²⁹ Kornblatt, *The Cossack Hero in Russian Literature*, p. 21.

³⁰ *Ibid.*, p. 38.

³¹ 『タラス・ブーリバ』は1835年に短編集『ミルゴロド』(Миргород)に収録されたが、大幅な改作を経て1842年に再出版された。以下本稿では、1842年版のテキストについて言及している。

³² *Ibid.*, p. 56.

3.1. 対立の調和と「ロシア性」

コーンブラットは、「境界の民として、コサックは対立するものを自身に包含し、野蛮と文明の境界上の諸要素を調和させた」³³ と述べるように、対立するものを調和させる能力を、「神話」上のコサックにとって最も重要な特質だと考えている。例えば、プーシキンのプガチョーフの乱を題材にした中編小説『大尉の娘』(Капитанская дочка, 1836)では、辺境警備隊に配属された青年貴族ピョートル・グリニョーフが、道中でドン・コサック出身の反乱首謀者エメリヤーン・プガチョーフと出会う。二人は、皇帝に忠誠を誓う貴族とコサックの反乱者という立場的には全く相容れない存在であるが、その間には奇妙な友情が生じていく。コーンブラットによれば、プガチョーフは破壊的な暴力性と他人に寄り添う親しみやすさを併せ持つ人物として描かれており、³⁴ ここにはすでに、対立を調停するコサックというイメージが見てとれる。しかし、とコーンブラットは言う。

プガチョーフはしかしながらまだ完全に神話的なコサックではない。ナロードの代表者としてのアタマンは、グリニョーフの人物像にある西洋化されながらも完全にロシア的な貴族とは対照的である。二人の登場人物は友情と相互の尊敬を共有しているが、プーシキンは究極的には団結ではなく対立を描いているのだ。作家がコサックに共感しているとしても、彼と読者の忠誠心は、いまだグリニョーフとともに残っている。³⁵

この指摘の通り、ピョートルはプガチョーフと友情を育むものの、彼の皇帝への忠誠心が揺らぐことはない。ただし、それでもプガチョーフの結末が、多分に読者の同情を誘う調子で描かれていることには留意が必要である。反乱は首謀者の逮捕によって終結し、ピョートルは停戦命令を受けて喜ぶが、同時に反逆者の悲惨な運命を想像して思い悩む。

しかし一方で、奇妙な感情が僕の喜びを曇らせていた。多くの無辜の犠牲者たちの血で染まった悪党と、彼を待ち受ける処刑についての物思いが、どうしても僕を煩わせたのだ。「エメリヤ、エメリヤ！」僕は苛立ちながら考えていた。「なぜ君は銃剣に突き刺さるか、散弾に倒れるかしなかったんだ？ それよりましなことなんて、君には考えられなかつただろうに」。³⁶

³³ *Ibid.*, p. 5.

³⁴ 「プーシキンが提示するプガチョーフは、貴族青年グリニョーフによって特徴づけられる善良なロシアの魂から引き離された、単純な悪の具現化では決してない。むしろ、その恐るべきコサックの反逆者の中には、エキゾチックな破壊と親しみやすい共感とが共存している」。Komblatt, *The Cossack Hero in Russian Literature*, p. 36.

³⁵ *Ibid.*

³⁶ Пушкин А. С. Капитанская дочка. М.: Издательство «Художественная литература», 1965. С. 193.

ピョートルは、自らとヒロインのマリヤを釈放してくれたことについて、プガチョーフに特別な恩義を感じている。貴族と反逆者という調和不可能な対立が、ここでは個人的な友情の問題に引きつけられることで解消されているともいえるだろう。さらに、このピョートルの独白は、コサックの英雄にとっては「銃剣に突き刺さるか、散弾に倒れる」という結末がふさわしいということを示唆している、とも指摘しておこう。

ともかくコーンブラットは、プーシキンの描くコサックの中に、すでに「自己／他者あるいは引力／斥力の矛盾という形の神話の核心」³⁷ があるとしながらも、そのイメージはまだ完成していないと見ている。

先に述べたように、コーンブラットによれば、「コサック神話」はゴーゴリの時代に完成した。そして神話的コサックの矛盾を調和するイメージも、彼の『タラス・ブーリバ』においてほとんど十全な形で表れているという。コーンブラットは、ゴーゴリが「コサックをロシア人との対比においてではなく、あたかも彼ら自身がロシア人であるかのように提示している」と指摘している。³⁸ 『タラス・ブーリバ』は、時代は明示されないものの、16世紀ないし17世紀のザポロージェ・コサックとポーランドの戦争を主題にしている。しかし、ゴーゴリは自身のコサックたちを「ロシア」と結びつける。

耕作者は自らの犁を折り、醸造者たちは自らの桶を投げて樽を割り、職人と商人は仕事も店も悪魔に渡して、家の鍋も叩き壊した。そして皆、何であろうが、馬上に座った。一言で言えば、ロシアの性格がここに力強く広大な広がり、強固な外観を呈したのである。³⁹

ここでは、コサックの気質が描写されているが、にもかかわらずそれが「ロシアの性格」だと主張されている。そして同様に、小説中で彼らが愛する土地は「ロシアの大地(русская земля)」、彼らの持つ魂は「ロシアの魂(русская душа)」と呼ばれる。コサックの「ロシア」性が強調される一方で、ロシアの貴族は「多くがポーランド人の習慣をまねて、豪華で壮麗な女中、鷹、猟犬、晚餐、邸宅などを持っていた」⁴⁰ として、コサックたちの敵国ポーランドの影響を受けてロシアの独自性を失っている。このように、『タラス・ブーリバ』では、コサックこそが純粋なロシア性を保持する存在とされているのだが、それを可能にするのは、キエフ・ルーシのイメージだとコーンブラットは言う。「ルーシによる仲介を通じてコサックとロシア人の間に換喩的關係を打ち立てたゴーゴリは、前者

³⁷ Kornblatt, *The Cossack Hero in Russian Literature*, p. 37.

³⁸ *Ibid.*, p. 45.

³⁹ Гоголь Н. В. Тарас Бульба. М.: Издательство Академии наук СССР, 1963. С. 9.

⁴⁰ Там же. С. 10.

の、さらに拡大して後者の、矛盾を調和する能力を繰り返し強調している」。⁴¹

また、コーンブラットは強調していないが、『タラス・ブーリバ』のコサックたちは叙事詩的な戦士として描かれている。コサックとポーランドの決戦が行われる第9章では、コサックたちが一人ずつクローズアップされた後、彼が斬られ、兄弟愛や「ロシア」への愛を叫びながら倒れて、その魂が天に飛び上がるという描写が繰り返される。

「さようなら、兄弟、友人たちよ！ 永遠に正教を信じるロシアの土地があり、そしてその地に栄光があるように！」そして彼はかすんできた目を閉じ、コサックの魂は厳格そうな身体から飛んでいった。⁴²

「兄弟よ、おれは立派に死ぬるようだ。[……]ロシアの土地が永遠に花咲くように！」そして彼の魂は飛び立った。⁴³

上村正之は、このような「英雄の登場→伝記的エピソードの挿入→戦いの末に果てる、という一連の叙述の流れは『イーリアス』の形式そのもの」⁴⁴ だと指摘している。『タラス・ブーリバ』においては、コサックたちは「ロシア」と結び付けられ、さらに叙事詩的な英雄と重ね合わされながら、「ロシア」を守る戦士としてのイメージが形成されている。

3.2. 女性の不在

コーンブラットは、ゴーゴリのコサックが「ロシアの魂」を体現するようになったとしつつ、しかしながら「少なくともゴーゴリにとって、その魂は明らかに男性のものである」⁴⁵ と述べている。実際に『タラス・ブーリバ』では、二人の息子がキエフの神学アカデミーから帰るやいなや、タラスは彼らをセーチ(ザポロージェ・コサックの本営)に連れていこうとする。タラスは、息子との別れを嘆く妻を「もういい、泣くのはもういい、婆さん！ 女(бабы)にかまうのがコサックじゃない」⁴⁶ と一蹴し、以降の物語は女人禁制のセーチと戦場で展開されている。さらに、コーンブラットによれば、ゴーゴリに限らず「コサック神話」一般において「女性はコサックにはなれない。コサックは男性である」と

⁴¹ Kornblatt, *The Cossack Hero in Russian Literature*, p. 45.

⁴² Гоголь. Тарас Бульба. С. 71.

⁴³ Там же. С. 73.

⁴⁴ 上村正之『『タラス・ブーリバ』におけるゴーゴリ的グロテスク』『ロシア語ロシア文学研究』53号、2021年、104頁。

⁴⁵ Kornblatt, *The Cossack Hero in Russian Literature*, p. 60.

⁴⁶ Гоголь. Тарас Бульба. С. 6.

いうことは「神話的コサック性の基本的な前提」⁴⁷ となっている。

もちろん「コサック神話」の中で女性が全く登場しないわけではない。コーンブラットも、「コサック男性と女性の関係が 19 世紀の文学において叙述されるとき、それらはほとんどいつも災害、裏切り、および／あるいは死をもたらす」⁴⁸ として、これを「悪魔としての女性(woman-as-devil)」⁴⁹ のトポスと呼んでいる。ただし、ここでの女性は、『タラス・ブーリバ』でタラスの次男アンドリーを破滅させたポーランド女性に代表されるように、ほとんどがコサック共同体外の女性であり、「コサック神話」において共同体内での男女関係の描写は希薄だといっている。

3.3. 〈コサック・ヒーロー〉と一般コサック

これまで見てきたように、コーンブラットは「コサック神話」を主に『大尉の娘』のプガチョーフや『タラス・ブーリバ』のコサックたちに代表される魅力的な人物をもとに論じている。しかし、19 世紀ロシア文学に現れるコサックは、「対立を調停する能力」をもつ英雄的人物だけではない。例えば、『大尉の娘』で主人公ピョートルの守備隊にいるコサックは英雄的形象とはほど遠く、司令官のミローノフ大尉も彼らを信用していない。「われらは全部で 130 人だ。コサックたちは数に入れておらん。奴らは頼りにならんからな」。⁵⁰ さらに、プガチョーフの軍勢が近づいたとき、コサックたちは不穏な動きを見せる。

要塞の中のコサックたちがいつになく動揺しているのが分かる。どの通りでも彼らは集まって小声で話し合っているが、竜騎兵や守備隊の兵士を見ると四方に散っていく。⁵¹

その後、彼らは結局寝返ってプガチョーフの側についてしまう。ここには、ある意味で肯定的・魅力的なプガチョーフとは異なる、もう一つのコサック像が現れている。それは、流動的で信用できない半独立的な集団としてのコサックである。その他にも、すでに上村によって、ミハイル・ザゴースキン(Михаил Николаевич Загоскин, 1789-1852)の歴史小説『ユーリー・ミロスラフスキー、あるいは 1612 年のロシア人』(Юрий Милославский, или Русские в 1612 году, 1829)において、肯定的コサックのキルシャと、その他のネガティブなコサックたちという 2 つのコサック・イメージが共存していることが指摘されている。⁵² 本稿は、このような非英雄的イメージも広い意味で「コサック神話」に

⁴⁷ Kornblatt, *The Cossack Hero in Russian Literature*, p. 61.

⁴⁸ *Ibid.*, p. 62.

⁴⁹ *Ibid.*, p. 64.

⁵⁰ Пушкин. Капитанская дочка. С. 134.

⁵¹ Там же. С. 136.

⁵² 上村正之「動乱期におけるコサック・イメージ:M.ザゴースキン『ユーリー・ミロスラフスキー、あるいは 1612 年のロシア人』を例に」『研究論集』北海道大学文学研究科、16 号、2016 年、33-52 頁。

属するものと考え、『大尉の娘』のプガチョーフ以降の英雄的コサックの系列を〈コサック・ヒーロー〉、それに当てはまらずしばしば否定的に描かれるコサックの集団を「一般コサック」と呼ぶことにする。

以上、コーンブラットが論じたように、ゴゴリの『タラス・ブーリバ』に典型的に表れる英雄的なコサックのイメージを中心に据えつつ、同時代の非英雄的なコサックのイメージも視野に入れたものとして、本稿が想定する 19 世紀ロシア文学における「コサック神話」の概要を示してきた。これを踏まえて、次章からはいよいよ『静かなドン』の分析に入ろう。

第 2 部「コサック神話」と『静かなドン』

4. グリゴリーとコサックたち

4.1. メレホフ家の起源譚

「メレホフの家は集落の一番端にある(Мелеховский двор — на самом краю хутора)」(1:1;1:19)。『静かなドン』はこの印象的な書き出しで始まる。長大な小説の解釈に挑もうとする者にとって、この一文は道標となる。実際、直後にメレホフ家がトルコ女の血を引くようになった経緯が語られることで、冒頭の表現はコサック集落における彼らの異質さを象徴していたのだという解釈が引き出せるだろう。しかし、コーンブラットは彼らの異質さをより広い文脈に結び付ける。メレホフ家の周縁的位置を「帝国の境界にいるコサック自身のよう」⁵³ だと見るのだ。この見方からは、メレホフ家の周縁性や異質さは帝国内部におけるコサックのそのメタファーであり、したがって、彼らメレホフ家はむしろコサック集団を代表する存在なのだという解釈が生まれてくる。両者は矛盾するようでありながらいずれも説得力のある解釈であり、実際、この逆説はソビエト批評界の論争にもしばしば登場した、グリゴリーの典型性や逸脱をめぐる論点ともよく符合する。本稿も、メレホフ家が異質な存在でありながら代表者でもある、という逆説を受け止めながら論を進めていく必要があるだろう。そこでまず、彼らの異質さの由来が語られる、冒頭すぐの部分に注目しよう。

コサックのプロコーフィー・メレホフは、クリミア戦争のとき妻としてトルコ女を連れて帰ってきた。この女は、いつもショールに身を包んでめったに顔を見せることがなく、ショールの珍しい異国風の模様も相まって集落の話題の種になった。しばらくすると、彼女が魔女であるとの噂が流れはじめ、ちょうど家畜の疫病が重なったことで過敏になったコサックたちに襲撃され、彼女は死んでしまう。その騒ぎが収まったとき、プロコーフィーが抱きかかえていた血まみれの早産児が、のちに主人公グリゴリーの父となる、パンテレイ・プロコーフィエヴィチであった。

このときから、トルコの血がコサックの血と交じり合いはじめた。こうして、集落に鉤鼻の、粗野

⁵³ Kornblatt, *The Cossack Hero in Russian Literature*, p. 153.

な美しさを持つメレホフ家のコサックたち(горбоносые, диковато-красивые казаки Мелеховы)、巷でいうところの「トルコ人」が起ったのである。(1:1;1:21-22)

これがメレホフ家の起源である。コーンブラットはこの逸話について、「赤ん坊は暴力から生まれる。これはあらゆる神話的英雄と同様に、コサックにとって吉兆となる始まりである」⁵⁴ としている。確かに、例えばローマ建国神話において、ロームルスとレムスは川に捨てられていたところを狼に助けられ、養育されたのだった。⁵⁵

メレホフ家には長男のペトロもいるが、彼は「小柄で獅子鼻(небольшой, курносый)」、「母親を思わせる(напоминал мать)」(1:1;1:22)コサックであり、先に引用したトルコ人風の特徴を持つのは、次男のグリゴリーだけである。

[……]年下のグリゴリーは、父親にそっくりだった。6 歳年下であるにもかかわらず、ペトロよりも頭半分ほど背が高く(на полголовы выше Петра)、親父と同じように、垂れ下がった鷲鼻(вислый коршуний нос)をもち、少し斜めに切れこんだ目には青みがかったアーモンド型の熱い瞳があり、頬骨の鋭い板が褐色で赤みを帯びた肌に覆われていた。グリゴリーは父親と同じように猫背で(сутулился)、微笑にさえ二人には共通の獣らしさ(звероватое)があった。(1:1;1:22)

「鉤鼻／鷲鼻」で「粗野な美しさ」を持ち、異質であるからこそコサック全体の代表たる資質を持つ存在、「メレホフ家のコサックたち」とは、具体的にはグリゴリーとパンテレイのことである。実際、物語はグリゴリーを中心に進んでいく。

4.2. 〈コサック・ヒーロー〉としてのグリゴリー

ここで、グリゴリーの形象を「コサック神話」の観点から分析してみよう。まず、先に確認したような彼の異質な容貌、つまり「粗野な美しさ」や「獣らしさ」を、「神話」的要素として指摘できるだろう。また、彼は美しい歌声の持ち主としても知られていて、のちにグリゴリーと決別することになる隣家のコサック、ステパン・アスターホフはペトロに対し、「ああ、お前らのとこのグリーシカは綺麗な声で歌うなあ！ まるで銀の糸を張ったみたいで、声じゃねえ」(1:5;1:40)と称賛している。本稿3で述べたように、歌はゴゴリのコサックにとって重要なモチーフであったが、⁵⁶『静かなドン』におい

⁵⁴ Ibid.

⁵⁵ 山田仁史『新・神話学入門』朝倉書店、2017年、22頁。

⁵⁶ Kornblatt, *The Cossack Hero in Russian Literature*, pp. 54-58.

でもそれは同様である。引用の箇所も荷馬車上でのコサックたちの合唱へと続いていくし、場面や社会情勢の転換に際して、コサックたちの歌がたびたび象徴的に挿入される。

戦争が始まると、グリゴリーはさらに「神話」的に描かれるようになる。グリゴリーが新兵訓練を受ける最中、対オーストリア開戦が知らされるが、折しも、グリゴリーの連隊はオーストリア国境付近に宿営しており、彼はすぐに最前線での戦闘を経験することになった。例えば以下は、開戦すぐの時期に、ある戦闘が馬上での白兵戦に発展した場面である。

グリゴリーに先んじて、シランチエフが駆けていた。彼を、尾の短い牝馬に乗ったハンガリー士官がほとんど至近距離で撃ち殺した。鞍の上で飛び跳ねると、シランチエフは倒れ、青い遠景を両手でつかみ、抱きしめた(обнимал руками голубую даль)……。[……]彼[＝ハンガリー士官]はリボルバーの弾をグリゴリーに撃ち尽くすと、長剣を素早く引き抜いた。三度の恐ろしい攻撃を、見たところ熟練した剣士である彼は、やすやすと退けた。[……]彼[＝グリゴリー]は誘いの一振りでハンガリー人の注意をそらし、攻撃の方向を欺いて、軍刀の先端で突き刺し、首元の、脊柱の付け根のところに二度目の攻撃を食らわせた。[……]

背後から頭に恐ろしい打撃を受けて、グリゴリーは意識を失った。彼は口の中に熱い塩辛い血を感じ、落ちていくのが分かった[……]。(3:13;1:273)

乱戦の中、同僚シランチエフが倒れ、グリゴリーとハンガリー士官との一騎打ちの中でグリゴリーが勝利したと思いきや、背後から別の敵に斬りつけられたという場面であるが、その描写が特徴的だ。あるコサックの死に続いてもう一人による敵討ちがなされ、さらにその彼自身も倒れる、という一連の流れと、その引き伸ばされた描写は、本稿 3.1. で見た『タラス・ブーリバ』における『イーリアス』的形式を想起させる。倒れたシランチエフが「青い遠景を両手でつかみ、抱きしめ」という崇高な表現も、ゴーゴリのコサックたちの魂が次々に天に昇って行ったことと重なる。したがって、この場面では、グリゴリーを通してゴーゴリ流の「聖戦士」的な決戦が再演されているといえる。ほどなくして、メレホフ家にグリゴリーの戦死が伝えられ、集落で葬儀が行われた。司祭がこう言ってパンテレイを励ましたように、まさしく「彼の死は神聖なもの(смерть его святая)」(3:16;1:288)であった。

しかし、この話には続きがある。戦死の通知から 12 日後に、兄のペトロからの手紙によって、グリゴリーは負傷したものの生きており、自力で中隊に帰還した、ということが伝えられた。それどころか、彼は道中で重傷の士官を救助して戻ってきたという。叙事詩的な「殉教」のはずが、別の命まで助けてしまったというこの顛末を、「コサック神話」の形式のパロディとみなすことができるだろう。さらに、先取りになるが、グリゴリーには「聖戦士」らしい最期、すなわち軍人としての英雄的

な殉職という結末が許されないのだという点も、小説の結末部分を解釈する際に重要になる。

このようにグリゴリーの形象を分析する上で、一点注意すべきことがある。それは、彼は革命までに「4 つのゲオルギー十字勲章と 4 つのメダルを得」(4:4;2:42)て、一兵卒から士官に登り詰めた卓越した騎兵であるのだが、この騎兵としての能力の高さが、そのまま彼の英雄的な〈コサック・ヒーロー〉の資質を意味するわけではないということだ。第一次世界大戦の当時においては、戦争の様相が変化し、伝統的な騎兵突撃による決戦自体が衰退しつつあった。テキスト上でも、グリゴリーは様々な種類の戦闘や軍事作戦に参加しており、それら多様な場面における彼の活躍が示されている。ただし、その語り方は叙事詩的な語りとは異なっている。

グリゴリーは焦らずに撃っている。二発の射撃の間に入念に狙いをつけ、目標を大声で叫ぶ小隊長に耳を傾けながら、彼の上着の袖口に這い上がっていた、まだら模様のてんとう虫を払い落とすことに成功した。それから突撃……。グリゴリーは銃床打撃(окованный приклад)で背の高いドイツの少尉を打ち倒し、三人のドイツ兵を捕虜にした。そして彼らの頭上を撃ち、小川のほうへ慌てて敗走させた。(4:4;2:40)

リヴォフ付近で、グリゴリーは命令なく騎兵中隊を突撃させ、オーストリアの砲兵中隊を整備兵もろとも撃退した。一月後のある夜には、「捕虜」を得るために(за «языком»)ブグ川をどうにか泳いで渡った。哨所に立っていた歩哨を突き倒した。(4:4;2:42)

以上はいずれも、1915 年のグリゴリーの活躍を叙述したものである。このように、遠距離での戦闘や銃床を用いた格闘、潜入作戦などの叙事詩的な決戦に当てはまらない戦闘行為は、もっぱら事務的な口調で語られている。ここから分かるのは、〈コサック・ヒーロー〉の資格は、単なる能力の高さではなく、あくまで「神話」的英雄像に合致するかによって決まるということだ。

1918 年にロシア内戦が勃発すると、少尉になっていたグリゴリーは、主に中隊長として戦線に立つようになる。しかし、士官学校の教育を受けたことがないために、「グリゴリーは、そうすべきであるように、脇から指揮を執ることがまだできなかった」(6:37;3:182)。彼は自ら先頭に立って指揮する以外の方法を知らないのである。階級と役職が変わっても、グリゴリーの卓越性は依然として「神話」的な騎兵の戦いによって特徴づけられている。以下にこの時期のグリゴリーの戦いの場面を引用するが、ここには、彼が近代的な戦争から「神話」的な決戦に突入する「境目」が描写されている。

彼が馬を駆けださせる瞬間から、敵のもとに飛び込んでいくまでの間には、内面的な変容の

捉えがたい瞬間があった。理性、冷静さ、用心深さ(разум, хладнокровие, расчетливость)——これらすべてがこの恐ろしい瞬間にグリゴリーを見放し、ある獣のような本能(звериный инстинкт)が、命令的な、統一的な仕方彼の意志の制御に入ってくるのだった。(6:37;3:183)

「理性、冷静さ、用心深さ」を失い、「獣のような本能」に支配されながら、彼は敵前に躍り出る。それに続いて、再びゴゴリ流の戦闘描写が、敵の士官についての回想を挟みながら 3 ページにわたって展開される。一部だけ引用しよう。

[……]カルムイク風的美男子セミグラゾフが、後ろ脚で立つ馬の足元へと倒れ込み、斜めに切断された胸を両手で押さえながら、静かに鞍から滑り落ちた。死の冷たさによって肉体が覆われた……。その瞬間、グリゴリーは鞍の上で背筋を伸ばし、鎧を踏んで腰を上げた。彼に向かって二人目がもう馬を制御できず、盲目的に疾走してきた。泡立った馬の口が上がった。その後ろに、グリゴリーにはまだ騎手は見えなかったが、軍刀の湾曲した刃と暗い溝は見えた。グリゴリーは全力で手綱を引き、一撃を受けてそれをそらした。そして右の手綱をつかみながら、傾けられた、剃りこまれた赤い首を斬りつけた。(6:37;3:185)

以上のように、グリゴリーは獣のような容貌や美しい歌声を持ち、さらに『タラス・ブーリバ』的な「聖戦士」の資質を(一部では改変しながら)受け継いでいる。彼は「コサック神話」における肯定的主人公、〈コサック・ヒーロー〉の系譜に連なる人物として描かれているといえる。

4.3. 一般コサックたち

一方で、グリゴリー以外のコサックたちについては、とりわけ彼らが集団として登場するときには、否定的な描写が目立つ。例えば、コサックたちは略奪や強姦を繰り返す「ならず者」の集団として描かれる。「戦争における略奪はいつも、コサックたちにとって最も重要な原動力だった」(6:9;3:69)というように、コサックたちは小説全編にわたって繰り返し略奪を行っている。さらに、グリゴリーの所属していた小隊が、訓練のためにあるポーランド地主の屋敷に宿営していたとき、コサックたちが地主の娘を集団で強姦する事件も発生している(3:2;2:209-211)。もちろん、これらの行為は規律違反で処罰の対象であるが、士官たちもコサックたちを制御することはできない。

また、戦闘においても集団としてのコサックは、勇敢に戦うどころか、恐怖に襲われて逃げ惑う場面が多く描かれる。

騎兵中隊はまばらな散兵線を展開した。再び進みだした。ドイツ軍の破壊的な射撃を受けて、

塹壕から 100 歩のところまで伏せをした。再び一部は消え始め、理性を失った者たちは地面に深く入り込んで伏せ、死の恐怖を飲まされて (опоенные ужасом смерти)、頭を持ち上げることも、身動きすることもできなかった。(4:3;2:35-36)

頭を少し持ち上げると、彼 [=グリゴリー] は、彼の騎兵中隊のコサックたちが滑ったり、転んだり、無意味に後ろや上へ撃ったりしながら山を逃げ降りていくのを見た。(4:4;2:49)

『静かなドン』においてコサックたちは、略奪や強姦などの暴力的行動を繰り返す一方で、戦闘においては恐怖や動揺のために無残に死んだり逃亡したりする。このようなコサックの描写は、本稿 3.3. で見た否定的なコサック・イメージとも重なるものであり、〈コサック・ヒーロー〉のグリゴリーとは対照的だといえる。

4.4. 〈偽コサック・ヒーロー〉の存在: チュバートイ、パンテレイ

これまで、『静かなドン』における〈コサック・ヒーロー〉と一般コサックの対比について指摘してきたが、このような対比は、それまでの「コサック神話」にも観察できるものである。しかしながら、『静かなドン』には他にも、〈偽 (pseudo) コサック・ヒーロー〉ともいうべき戯画的な人物が登場する。彼らにおいては、非英雄的な一般コサックの場合とは異なり、「コサック神話」的な英雄像が積極的にパロディ化されている。彼らの形象はそれ自体が「脱自然化」的であると同時に、グリゴリーの傑出性を際立たせる役割も果たしている。

そのような人物の例として、連隊でグリゴリーが出会うコサックのチュバートイに注目しよう。チュバートイは、開戦後に補充中隊からグリゴリーの連隊に移ってきたコサックで、「背が高く、猫背 (высок, сутуловат) 」(3:12;1:265) という特徴はグリゴリーと共通する。彼の姓はウリュピンというのだが、「彼は禿げ頭を光らせていて、こぶのようにふくらんだ剥き出しの頭の両側面に亜麻色の毛がまばらに生えていただけだった」(3:12;1:265)。これを面白がって、コサックたちは彼に「チュバートイ (Чубатый) 」というあだ名を付けたのである。「チュバートイ」の語源 чуб は古いウクライナ人の髪型で、剃った頭の頂部に残された長い髪の束を指す語である。これは『タラス・ブーリバ』においてザポロージェ・コサックの形象に用いられる、「コサック神話」の伝統を想起させる語である。⁵⁷ 禿げ頭のコサックにこの名がつけられることで、ゴゴリ的なコサックのイメージはパロディ化されている。

⁵⁷ 例えば、『タラス・ブーリバ』に以下の記述がある。「[……]ザポロージェ人は、ライオンのように道いっばいに手足を広げていた。誇らしげに投げ出された彼の前髪は、地面を半アルシンも掴んでいた ([……] запорожец, как лев, растянулся на дороге; закинутый гордо чуб его захватывал на пол-аршина земли) 」。Гоголь. Тарас Бульба. С. 19.

他にも、チュバートイは非常に「コサックらしい」特徴をもつ人物である。彼は、初めての人殺しを経験して沈んでいるグリゴリーを非難して「首を斬り落としてやろうか？[……]俺は人を殺しても悲しまない、俺には哀れみの心がないからな！」(3:12;1:265)と言い放つ。彼はさらに、コサックと殺人行為の関係についてこう語る。

「人間は大胆に斬れ。人間は生地のように柔らかいからな」。チュバートイは目で笑いながら説いた。「それがどんなものなのか考えちゃだめだ。お前はコサックで、お前の仕事は何も言わずに斬ることだ。戦争では敵を斬ることが神聖な仕事(святое дело)なんだ。蛇にそうするのと同じで、一人敵を斬るごとに、神様はお前の罪を一つ減らしてくれるんだ」。(3:12;1:266)

彼は殺人を恐れない豪胆さを持ち、信心深く、敵を斬ることを「神聖な仕事」と位置づける。ここには明らかに「コサック神話」のイメージが利用されているが、その形象は誇張されている。そして、グリゴリーは彼の過激な思想を受け入れることができない。また、「チュバートイはすべての馬に恐れられている」(3:12;1:266)というように、コサックの重要な持ち物である馬ですら彼を忌避する。つまり、チュバートイは「コサック神話」のイメージが付与されつつも、それを戯画化した形象、〈偽コサック・ヒーロー〉的な人物である。

さらに、グリゴリーの父パンテレイも、同様に〈偽コサック・ヒーロー〉とみなすことができる。先に見たように、パンテレイはメレホフ家の起源譚から生まれた赤子まさにその人であり、「神話的英雄」(＝本稿の〈コサック・ヒーロー〉)の資格を持つはずの人物である。しかし実際には、彼は非常に滑稽な人物として描かれる。彼はグリゴリーと同じく優れた体格の持ち主であるが、「若い頃に皇帝による閲兵式での競馬で左足を挫いた」(1:1;1:22)ので、びっこを引いて歩いている。また、パンテレイはいつも昔の武勇伝を語っていたが、内戦の戦況が悪化して老人までもが徴兵されるようになると、何度となく戦線から脱走してしまう。脱走兵として裁判にかけられたときには、息子グリゴリーの功績のために鞭打ちを免除されて大喜びで家に戻るが(7:22;4:163)、その後、撤退先でチフスに倒れて死んでしまう。民俗学者のコルチェーフは、彼の不自由な足や、彼が戦場で活躍する代わりに家庭内で何度も癩癩を起こすことなどを念頭に、パンテレイを「ブリーナ的な英雄の一種のパロディ、「家庭的」なスケールの叙事詩的英雄」⁵⁸ だと評している。グリゴリーとそっくりな容貌を持ちながら、戦場から逃げ続け、撤退先で病気に倒れる。このようなパンテレイも〈コサック・ヒーロー〉のパロディ的人物と解釈することができるだろう。

⁵⁸ Колчев В. Ю. Фольклорно-мифологические истоки образа Пантелея Прокопьевича Мелехова (по роману М. А. Шолохова «Тихий Дон») // Фольклор и литература: проблемы изучения / Под ред. Т. Ф. Пуховой. Воронеж: Воронежский государственный университет, 2001. С. 62.

『静かなドン』においては、「神話」的なコサックのイメージが随所に利用されているが、それらのイメージは『タラス・ブリーバ』のコサックたちのように統一された形で与えられるのではない。「コサック神話」の肯定的イメージが主人公のグリゴリーに集められることで、彼が〈コサック・ヒーロー〉として描かれる一方、一般コサックは「臆病さ」「略奪」「強姦」などの否定的イメージをもった集合体として描かれることが多い。さらに、小説にはチュバートイやパンテレインなどの戯画的人物、〈偽コサック・ヒーロー〉が登場し、彼らがグリゴリーと対比されることで、グリゴリーが小説内において唯一の〈コサック・ヒーロー〉であることが示されている。

4.5. グリゴリーと「プラウダ」

グリゴリーは、モラルの面でも一般のコサックたちから逸脱している。先述したように、『静かなドン』では全編にわたってコサックたちの不法行為が描かれるのだが、グリゴリーはほとんどそれらに参加していない。例えば、地主の娘が強姦される事件の際にもグリゴリーは加わらず、そのことを上官に報告しようとしてコサックたちに捕まってしまう。騒ぎが終わった後で引きちぎられたボタンの跡を見て、「彼は記憶に貫かれて、久しぶりにほとんど泣き出しそうになった」(3:2;1:211)のであった。さらに、内戦期になり士官になったグリゴリーは、自身のみならず部下に対しても略奪を禁じている。

しかしグリゴリーには、どうしてもそれが馴染まなかった。彼は他人のものに触れることをなんとなく恐れ、また略奪に嫌悪感を持っていたので、食料と馬の飼料しか取らなかった。彼自身が率いるコサックによる略奪は、彼の目には特に不快に感じられた。騎兵中隊を彼は厳しく統制していた。(6:9;3:69)

このようにコサック集団から逸脱するようなグリゴリーの行動は、その政治的な迷いとも関係している。第一次世界大戦中にドイツ戦線で負傷した彼は、病院でウクライナ人のガランジャと出会い、彼に共産主義思想を吹きこまれて感化された。これが彼の政治的動揺の第一歩となる。

グリゴリーは、賢く辛辣なウクライナ人が、皇帝や祖国、戦争におけるコサックとしての義務についての以前からの観念を、徐々にではあるが一貫して破壊していくのを、恐怖とともに認識していた。(3:23;1:314)

しかし、退院して家に帰ったグリゴリーは、ゲオルギー十字勲章の受章者として集落中で熱烈な歓待を受ける。そして、そこで数週間の休暇を過ごした彼は、共産主義の思想を一旦は封印して

戦線に戻っていった。

グリゴリーは前線からある種の人間として来たが、別の人間として去っていった。彼が生まれたときから身に付けてきた、全人生を通して愛している自分のコサック的なものが、偉大な人間の真実を乗り越えたのだ(Свое, казачье, всосанное с материнским молоком, кохаемое на протяжении всей жизни, взяло верх над большой человеческой правдой)。(4:4;2:39)

ここでは「コサック的なもの」が「人間の真実(человеческая правда)」すなわち共産主義と対置されることで、両者が相容れないものであるように書かれている。確かに、政治的なレベルでいえば、帝政派にせよ独立派にせよ、コサックの利益を追求する思想と、共産主義を志向する思想とが両立不可能なことは明らかであり、実際に、グリゴリーたちはそのいずれにも同一化できずに彷徨っていくことになる。

しかし、ここでは「人間の真実」という抽象的な表現が目を引く。実は、これとほとんど同じ言葉がすでに小説第3部でも登場しているのである。開戦直後、ある老コサックが宿営に来たコサックたち(ここにグリゴリーは登場しない)に次のように語りかけている。

「一つ知っておきなさい。生き残って、死の戦争から無事に抜け出したいなら、人間の正義を守らなくちゃいけない(надо человекую правду блюсть)」。

「どんな？」脇に寝ていたステパン・アスターホフが聞いた。[……]

「それはこんなことだ。戦争では、他人のものを取るな。これが一つ。断じて女に触るな。そしてもう一つ、こんなお祈りを知っておかなきゃいけない」。(3:6;1:226)

老コサックはこう言って、彼らにいくつかの祈祷文を見せ、コサックたちはそれぞれ好きなものを書き写して大事に懐にしまうのだが、ここでは、祈祷文そのものはあまり重要ではない。「お祈りを身に着けていた者たちにも、死は覆いかぶさった」(3:6;1:228)からである。ここで注目すべきなのは、老コサックが語った「人間の正義(человекую правда)」の方だ。これは、先に引用した場面で共産主義を意味していた「人間の真実(человеческая правда)」とほぼ同じ表現である。『静かなドン』は非常に長大な小説ではあるが、この両箇所はいずれも1928年に連続して発表されているため、この表現の一致は意図されたものとみるべきだろう。

グリゴリーがガランジャに教えられた「人間の真実」、つまり共産主義は、それ自体は人間の尊厳を志向する普遍的な思想である。実際、グリゴリーは共産主義について教えられたとき、「無力にもそれに反論できなかった。反論などなかったし、見つけることもできなかった」(3:23;1:314)と感

じている。そして、グリゴリーは各陣営を揺れ動く中でも、共産主義の思想そのものを否定することはない。第5部で彼が赤軍と決別したのも、「同情」論者たちが指摘したように、指導者ポドチョールコフの捕虜虐殺に失望したからであったし、テキスト内には、コサックでない者のものを含め、赤軍兵たちによる不当な暴力が繰り返し描かれている。彼が信じた「人間の真実」は、内戦という状況の下ではほとんど守られていなかったのである。一方で、老コサックが説く「人間の正義」は、宗教的な文脈と結びついたコサックの掟にすぎないものだが、戦場での略奪や強姦を戒めるその内容は、普遍的な倫理に通じるものでもある。前章で見たように、コサックたちの略奪と強姦は、「コサック神話」においてそうであるように、『静かなドン』においても日常茶飯事であり、コサックの掟であるはずの「人間の正義」は実際には全く守られていない。逆に、略奪や強姦を忌避するグリゴリーは、一般のコサックからみれば異質であるが、その行動原理は実は「人間の正義」に適うものであった。

グリゴリーは「真実」や「正義」、すなわち現実には不可能な「プラウダ(правда)」を追い求めて政治的に迷い、コサックたちから逸脱していく。実際、いち早く赤軍に参加した過去のあるグリゴリーは、赤軍との決別後も、思想的に不安定な人物としてコサックたちの警戒の対象となる。集落で組織された反乱軍で隊長を務めた兄のペトロは、グリゴリーにこう語りかけている。

彼は急に話を変えた。「ほらお前は、俺にとって血を分けた兄弟だが、俺にはお前のことが分からないんだ。まったくだよ！俺は、お前が俺からなんだか離れて行っているような気がする……。本当にそうか？」そして彼は自答した。「そうだ。お前は目が回っているんだ……。お前が赤に寝返るのが心配なんだよ……。お前は、グリーシャトカ、まだ自分を見つけていないんだ」。(6:2;3:20)

しかし、グリゴリーの迷いは、コサックたち全体の迷いでもあるということが次第に明らかになっていく。「メレホフ！俺は自分の命をお前の足元に投げ出す、俺たちを無駄にしないでくれ！コサックたちは動揺している」(6:41;3:214)。平松が述べるように、「グリゴリーはそのようなコサック集団全体の迷いをつねに先取りして、集団から逸脱することによって集団全体の動きを代表し、ある意味コサックの動揺を導いている」。⁵⁹そして〈コサック・ヒーロー〉である彼は、コサックたちの迷いを最も痛烈に経験してしまう。

そして結局、グリゴリーに代表されるコサックたちは、物語の中でどこにも行きつくことができないまま終わることになる。1920年、グリゴリーは撤退の道中、ノヴォロシースクでクリミアへの

⁵⁹ 平松潤奈「ミハイル・ショーロホフ『静かなドン』におけるコサック：その主体化と解体」『「スラブ・ユーラシア学の構築」研究報告集』、北海道大学スラブ研究センター、21号、2007年、9頁。

輸送船に乗り込んでいる白軍を目撃した。彼は仲間とともに掛け合ったが、港は極度の混乱状態にあり、乗船を拒否されてしまう。「今ではわれわれは必要なくなったんですか？ でも前は必要だったんですか？」(7:28;4:209)グリゴリーたちは結局乗船を諦め、取り残された数人の仲間とともに相談した結果、次のような結論に達する。

「[……]俺たちはコサックだろう、じゃなければ誰なんだ？ もし赤軍が俺たちを生かしておいてくれるなら、赤軍に勤務しに行こう！ 俺たちはドン・コサックだ！ 純血で、混ぜものなしの！ 俺たちの仕事は、斬ることだ。[……]」(7:28;4:214)

こうして、グリゴリーたちは赤軍に合流する。しかし、それは政治的な選択といえるものではなく、赤軍に入ることが生き残るための唯一の道であったということにすぎない。内戦勃発からグリゴリーは「真実」を求めて揺れ動き、そして彼の動揺は、次第にコサック全体を代表するようになった。しかし彼らは、最後に政治的な主体性を失い、仕方なく革命を受け入れて赤軍に勤務することしかできなかった。

5. メレホフ家の死:解体されるコサック社会

前章で見たように、小説第7部では戦況が悪化し、コサックたちの政治的な動揺も行き詰まりを迎えていった。同じころ集落では、メレホフ家を立て続けに襲う死、それも戦場とは直接関係のないはずの女性の死が際立つ。本章では、彼女らの死とメレホフ家の崩壊が、コサック社会全体の荒廃を象徴するという見方を提示する。

5.1. 女性の死:先行研究

『静かなドン』は、戦場でのコサックの活躍のみならず、集落でのコサックの日常生活にも焦点が当てられるという点で、従来のコサック文学とは一線を画す作品である。また、集落での生活に焦点が当たることは、戦場に赴かないコサックの女性たちが注目されることも意味しており、先行研究には、作品内における女性表象の豊富さに注目するものも見られる。『静かなドン』において一定以上の役割を果たす女性は、メレホフ家の女性たち(ナターリヤ、ダーリヤ、ドゥニャーシカ、イリーニチナ)やアクシーニヤ、その他コサックの妻たち、そして коммуニストでユダヤ人女性のアンナなどを挙げることができるが、アメリカの文学研究者デイビッド・スチュワートは、『静かなドン』の多くの女性たちの中では、3人が記念碑的に描かれている。グリゴリー・メレホフの母、妻、愛人である。彼女らは主人公の周りで眩い星座をなしている」と述べ、彼女たちを一般のコサック男性よりも

重要な人物とみなすほどである。⁶⁰

しかしながら、小説における女性の役割やその意味についての研究は、あまり深くなされていないようだ。その中でコーンブラットは、コサックの女性たちを男性と同様に「コサック神話」の枠組みで分析している。コーンブラットは、グリゴリーの兄嫁ダーリヤの過剰なセクシュアリティや、彼女がペトロとの間に子供を残せなかったこと、そして梅毒を患って自死することを指摘し、『静かなドン』では、コサック神話一般においてそうであるように、その存在が性的に危険すぎる女性たちは、悲しみしかもたらさない⁶¹と述べている。しかし、本稿 3.2 で指摘したように、「コサック神話」を形成してきた『静かなドン』以前の文学作品において、コサックの女性はまだ大きな位置を占めていなかったことから、コーンブラットのアプローチの有効性には疑問もある。実際、コーンブラットが「性的に危険すぎる女性」として念頭に置いている人物の一人は、『タラス・ブーリバ』でアンドリーを誘惑したポーランド女性だと思われるが、彼女はコサック共同体に関係する人物ではない。⁶²

女性像をめぐる先行研究が少ない中で、注目すべきなのは平松潤奈の分析である。平松は、小説に内包されたジェンダー構造の観点から第 7 部の女性たちの死を解釈している。そこでは、メレホフ家の女性たちと最後まで生き残るグリゴリーとの比較から、以下のような問いが提示される。

なぜこのような性別に基づく運命の割り当てがあるのだろうか？ なぜ、ほとんど常に戦場で自分の生を危険に晒しているグリゴリーが死なず、一方で常に私的な生にある若い女性たちが不可避的に死ぬのだろうか？⁶³

平松は、小説全体の構造について「戦争・政治(公的領域)と恋愛・家庭(私的領域)各々におけるこの二つの物語軸は基本的に切り離され、コサック社会の女性たちは後者の時空間に囲い込まれている」と述べており、⁶⁴ 男女の結末の問題も、公的領域の男性／私的領域の女性の対立構造に関係するとしている。

[……]グリゴリーは、政治的主体として、たとえ不可能に見えたとしても生まれ変わる可能性を持っているのであり、わずかであってもまさにその可能性を考慮して、赤も白もコサック

⁶⁰ David H. Stewart, *Mikhail Sholokhov: A Critical Introduction*, Ann Arbor: The University of Michigan Press, 1967, p. 94.

⁶¹ Kornblatt, *The Cossack Hero in Russian Literature*, p. 155.

⁶² *Ibid.*, pp. 64-65.

⁶³ Хироману Д. Уничтожение тела в ранней советской литературе: женщины, казаки и революционеры в «Тихом Доне» // Дальний Восток, близкая Россия: Эволюция русской культуры — взгляд из Восточной Азии / Под ред. В. Гречко, С. Кима, С. Нонака. Белград: Издательство «Логос», 2015. С. 173.

⁶⁴ 平松潤奈「ショーロホフ『静かなドン』におけるジェンダー/セクシュアリティ:根絶される女性の身体について」『ロシア語ロシア文学研究』38号、2006年、26頁。

たちを自分の側に引き込もうとしたのだ。だが、最初から政治的領域から排除されていた女性たちには、そのような可能性は全く予測されていなかった。⁶⁵

この分析によれば、女性は政治的に価値がないとみなされるために、コサック男性に代わって絶滅の対象となるが、それと同時に、その代償に生き続けるグリゴリーには、未来における政治的な転向の可能性が(小さいとしても)残されているという。しかしながら、『静かなドン』にはこの解釈が当てはまらない点が二つある。一つ目は、タートルスキー集落の青年コサックたちの多くが戦死しているという点だ。しかも彼らの戦死は、後に見るように、女性たちの死と同じ第7部において悲痛を極めている。そして二つ目は、メレホフ家あるいはグリゴリーに関係する女性たち(ナターリヤ、ダーリヤ、アクシーニヤ、イリーニチナ)が次々に死を迎える一方で、それ以外のコサックの妻たちの最期に関する描写はほとんどないという点である。「性別に基づく運命の割り当て」がメレホフ家以外に当てはまらないのだとすれば、その意味についてはさらなる検証が必要だろう。

5.2. メレホフ家の崩壊

以上のような先行研究を踏まえつつ、本稿が取る見方は、メレホフ家の人々の死はコサック共同体が崩壊する過程を象徴する、というものである。⁶⁶ コーンブラットは、「[メレホフの]家族の離散は、コサック軍全体の分裂と並行している」⁶⁷ と指摘しているが、本稿は戦場の「コサック軍全体」というより、メレホフ家とコサック共同体の関係に焦点を当てる。この解釈の根拠の一つは、やはり小説冒頭の一文である。「メレホフの家は集落の一番端にある」。異質な容貌を持ち、傑出した軍事的才能を持つコサックであるグリゴリーがコサックたちの政治的な迷いを代表していったとすれば、その他のメレホフ家の人々は、同様の仕方で集落の荒廃を代表していくのだ。平松は、『静かなドン』のテキスト全体を、公的領域／私的領域に二分されるものとして分析していた。テキスト上の空間を公的／私的という枠組みで二分することには議論の余地があるが、少なくとも戦場と集落の二つの空間が存在し、それらがほとんど切り離されたまま物語が進行することは、この小説の大きな特徴の一つである。

戦争が進むにつれてメレホフ家は少しずつ瓦解していく。すでに第6部において、反乱軍の騎兵隊長を務めていたペトロがミシカ・コシェヴォーイらの赤軍部隊に捕らえられ処刑されていたが、第7部に入ると、メレホフ家を次々と死が襲うようになる。ナターリヤは、グリゴリーとアクシーニヤが再びよりを戻したことを知り、家出を口にする。それをイリーニチナに止められると、ナターリヤ

⁶⁵ Хирамацу: Уничтожение тела в ранней советской литературе. С. 173.

⁶⁶ メレホフ家に属さないアクシーニヤの死については、グリゴリーの運命に関わるものとして次章で取り扱う。

⁶⁷ Kornblatt, *The Cossack Hero in Russian Literature*, p. 158.

は、集落のある老婆のもとで妊娠中のグリゴリーとの子を中絶することを決意した。しかし、帰ってきたナターリヤは大量出血により衰弱しており、駆け付けた医者も「子宮が引き裂かれていて、本当に生きているところがない」(7:16;4:124)とさじを投げ、彼女はそのまま死んでしまった。また、もとより性的に奔放だったダーリヤは、ペトロの死後さらにその傾向を強め、様々な男と行きずりの関係を持つようになった。しかし、彼女は梅毒に罹患し、治癒の見込みがないことを知ると、自死を決意する。その後、ダーリヤはドゥニャーシカと川で水浴びをしていたとき、突然「さようなら、ご婦人方！」と叫んで、石のように水底へ沈んでいった」(7:21;4:151)。

戦争と直接関わらない彼女たちの死は異様に映るが、これらは物語上、コサックたちの大量死の前触れになっている。ナターリヤとダーリヤの死が描かれたすぐ後に、今度は前線から戦死した三人のコサックたちが運ばれ、集落は悲しみに覆われる。「[戦死した]アニクーシキンの妻は斬られたかのように泣き叫び、あんまり嘆いたので、パンテレイ・プロコーフィエヴィチは胸が締め付けられた」(7:24;4:171)と描かれるように、夫を失った女たちは嘆き悲しむ。

ちなみに、この場面では続いて別の人も運ばれてくる。「あら、また誰か死んだ人を前線から運んでくるわ！」(7:24;4:173)と遠くから気づいたドゥニャーシカが目を凝らしてみると、それがグリゴリーとその馬であることが判明する。「グリーンシャを運んでくるんだわ！……彼の馬よ！」(7:24;4:173)。彼女とパンテレイ、イリーニチナはグリゴリーの死を覚悟して絶望するが、グリゴリーは死んだのではなく、チフスに罹って療養のために護送されてきたのであった。戦況が悲惨を極め、次々とコサックたちの遺体が届けられる場面でも、グリゴリーは生きたまま帰ってくるのである。

そして、撤退先でのパンテレイの死が語られた後、メレホフ家の瓦解を締めくくることになったのは、イリーニチナの死である。白軍のクリミア撤退からしばらくして、戦線から集落へミシカ・コシェヴォイが帰ってきた。かねてからドゥニャーシカと恋仲にあった彼はメレホフ家に居つくようになり、ドゥニャーシカはイリーニチナの反対を押し切って彼と結婚してしまう。ミシカがドゥニャーシカと結婚すると、イリーニチナは家の中での居場所を失ってしまった。「彼女は、そのほとんど全人生を過ごしてきた家で余計者になってしまった」(8:3;4:239)。イリーニチナはみるみる衰弱し、グリゴリーの帰還だけを待ち望みながら死んでしまう。そして、このイリーニチナの死は、メレホフ家を最終的に崩壊させるものになった。なぜなら、彼女の死によって、ミシカが「唯一にして全権の主人として」(8:4;4:245)メレホフ家に乗っ取るようになったからである。そしてその直後、ミシカは名ばかりの議長であった耄碌した老人に代わって、集落の革命委員会議長に就任する(8:4;4:249)。メレホフ家の解体とタタールスキー集落における革命は、ここに同時に完成している。

6. グリゴリーの運命:「神話」の解体

『静かなドン』第 8 部は、小説全体から見ると異質である。直前の二つの章で見たように、内戦においてドン地方に関わる戦闘は第 7 部までにおおむね終結したし、集落における革命も第 8 部が始まってまもなく完成した。以降もドン地方以外での戦闘や、小規模な反乱などは描かれるが、そこにはタタールスキー集落のコサックたちは登場しない。そうであるならば、自らの死によってコサック社会の荒廃を象徴したメレホフ家の人々と同じように、異質だからこそコサックの動揺と行き詰まりを代表してきたグリゴリーも、その役目を終えたように思われる。しかし、それにもかかわらず小説はまだ続き、グリゴリーは彼の個人的な運命に向かっていく。そして、この部分こそ『静かなドン』で最も重要な部分だといってもよいだろう。実際、第 1 章で見た先行研究はほとんどがグリゴリーの運命を問題にするものであったし、エメリヤーノフも、この第 8 部こそ「批評家たちの間にまきおこった激しい論争のすべての原因」⁶⁸ だと述べているのだ。本章では、そのような終結に向かうグリゴリーを分析し、彼の運命を〈コサック・ヒーロー〉の解体とみなす解釈を与える。

6.1. 農民生活からの放逐

白軍のクリミア退却を見送った後、赤軍士官としてブジョンヌイの騎兵隊で勤務していたグリゴリーは、負傷をきっかけに復員されて集落へ戻ってくる。その道中、彼は平穏な生活と、畑仕事に出る自分の姿を夢想している。

グリゴリーは、家で外套と戦闘靴を脱いで、ゆったりとした長靴を履き、コサックの習慣に従ってズボンを白い毛糸の靴下の中に入れ、暖かいジャンパーの上に手織りのジブーンを羽織って畑に出る、というようなことを楽しく想像していた。(8:6;4:263)

しかし、このような彼の願いは実現不可能であった。前章で見たように、兄の仇にして政敵でもあるミシカが、集落の革命委員会議長として、さらにかつてのメレホフ家では主人として、君臨していたからだ。グリゴリーにとって彼との対立は避けられないものであったし、ミシカにとってグリゴリーの罪は、一時の赤軍勤務では全く償えないほど重いものだった。「お前が士官じゃなかったら、誰もお前のことに触れたりしないさ」(8:6;4:273)とミシカが言うように、農民として平和に暮らしたいというグリゴリーの願いを阻むのは、彼の階級とその輝かしい軍功の数々である。ここでのグリゴリーの行き詰まりからは、第 1 章で取り上げたエメリヤーノフの見解が想起される。「コサックの反乱における彼の役割、彼がかつて犯した罪はあまりにも大きく、グリゴリーはその過去に対する、すなわち「悲劇的過失」に対する返報を受けるのである」。グリゴリーは仲間のコサ

⁶⁸ エメリヤーノフ／伊東訳『静かなるドン』とその批評家たちについて」、527 頁。

ックたちと同じように動揺を経験したのだが、天賦の才を与えられすぎていたために、赤軍とボリシェヴィキ政権に与えた打撃＝罪はあまりに大きく、彼だけは平穏な生活を送ることが許されないのだ。しかし、グリゴリーの運命の原因をこのことのみに帰することはできない。ここから、グリゴリーは収監されることも処刑されることも拒否し、あくまで生き残る道を模索していくからだ。

6.2. 団匪への参加

グリゴリーは、逮捕の危険が迫っていることをドゥニャーシカに教えられると、一人で集落から逃亡する。しかしその道中、見知らぬコサックに囲まれ、フォミンのもとに連行された。フォミンはグリゴリーの顔なじみで、食糧徴発隊の騎兵中尉であったが、徴発の苛烈さに接して、ソビエト政権に反抗するための団匪(банды)を組織していたのだ。グリゴリーは彼の反乱が成功するとは全く思えなかったが、他に道がなかったので団匪に参加することを決めた。

この団匪への参加、すなわち革命への最後の反抗こそ、第1章で見たエルミーロフら「離反」論者が看過できなかったものであり、グリゴリーが人格的に「荒廃」したという議論の根拠となるものであった。しかし、フォミンの団匪がコサックたちの取り込みに失敗して反乱成功の見込みがなくなっていくにもかかわらず、彼の人格的な「高潔さ」やコサック的な「戦士」の資質はほとんど失われていない。例えば、グリゴリーは団匪のメンバーが略奪を繰り返すのを見て、「もしお前が規律を立てず、略奪とどんちゃん騒ぎを止めさせなかったら、俺はお前と別れて部隊の半分を連れて行くからな」(8:13;4:318)とフォミンに怒りを露わにしている。さらに、団匪が赤軍の急襲を受けた際には、あの「ゴゴリ的」描写が再び挿入されている。

向かってくるラフ攻撃[＝コサック騎兵の包囲戦術]と同時にまっしぐらに突進して接近しながら、彼は目標を選んでいった。短いなめし革の半外套を着た赤軍兵が疾駆してきた。[……]次の瞬間、彼は打撃をかわし、自分の剣で斬らなければならなかった。騎手から5サージェン[＝約10メートル]のところで、グリゴリーは急激に身を左に傾け、頭の上で軍刀の鋭いぴゅうという音を聞いた。そして鞍の上で素早く姿勢を起こすと、自分の軍刀の切っ先が彼のそばを通り過ぎた赤軍兵の頭に触れた。グリゴリーの手はほとんど打撃の力を感じなかったが、振り返ると彼は、崩れ落ち、鞍からゆっくりとずり落ちる赤軍兵と、彼の黄色い外套の背中のところ濃い血の線が浮かんでいるのを見た。灰色の馬は襲歩から速度を落とし、もう大股の速歩になって進みながら、妙に頭を持ち上げて、まるで自分の影に怯えたかのように体を傾けた……。 (8:13;4:322)

第1章で見たように、エメリヤーノフはグリゴリーの「荒廃」を否定し、彼が「どのような場合に

も力に満ちあふれ、情熱に燃えている」と述べていた。そして、本稿の見方もそれに近い。ここまでの議論に即して言えば、グリゴリーは、政治的な立場を失い、政治の世界から逃避した農民生活への希望も失い、遠からず破滅するであろう団匪に身を置いたとしても、まだ〈コサック・ヒーロー〉の資格を保ち続けているということだ。しかしながら、グリゴリー個人が英雄的でありつづけているとしても、彼はもはやコサックたちを代表する力を失っているのであって、その意味で、英雄的形象の解体は確実に進行している。

6.3. 最後の逃避行とアクシーニヤの死

ほどなくしてフォミンの団匪は崩壊する。その後、離脱したグリゴリーはひそかに集落に戻り、アクシーニヤを誘って「クバンか、あるいはもっと遠くへ」(8:17;4:354)逃げることを決意した。それは彼にとって最後の希望であった。クバンはクバン・コサックの本拠地であり、コサックの主要な根拠地のうちでは最南端に位置する場所である。『静かなドン』においてもクバンは、グリゴリーが戦場で出会うコサックたちの出身地、あるいは軍事作戦上の地名として繰り返し現れる。しかし、グリゴリーとアクシーニヤの物語において、「クバン」は特別な意味を持っている。

戦争が始まる前にも、グリゴリーは彼女との駆け落ちを画策したことがあった。「明日アクシーニヤを呼び出して、一緒にクバンへ出発しよう、ここからなるべく遠くへ……遠く、遠くだ……」(2:10;1:145)。しかしこの計画の不可能性はすぐに明らかになる。「兵役だ！ 俺がアクシュートカと一体どこへ行けるっていうんだ？」(2:10;1:145)。結局、彼らは兵役という現実的な事情のために、クバンではなく、集落からそう遠くないヤードゴノエの屋敷に住みこむことになったのだった。

そして、彼が第8部で再び逃避行を計画したとき、クバンは戦火や身の危険から逃れられる安全な場所として認識されているのではない。グリゴリー自身、戦況の急激な悪化を思いながら、「白軍は[……]ドンで持ちこたえられなかった以上、クバンでも持ちこたえることはできない」(7:27;4:197)だろうと悲観していたからだ。それでも、グリゴリーにとってクバンは「現実」からの逃避の地として繰り返し想起される。最南端のコサック根拠地であるクバンは、グリゴリーにとって一つの空間的な限界になっている。彼が「遠く、遠く」へと思いを巡らせても、クバンより遠い土地は具体性をもって現れない。第7部で彼がクリミアへの撤退に参加しなかったことを思い出そう。〈コサック・ヒーロー〉のグリゴリーには、空想上であれ現実にてあれ、コサックと関係づけられた土地の外へと出ることはできないようだ。ここでの「クバン」を、「神話」的なコサックの領域とみなすことができるだろう。第8部におけるアクシーニヤとの逃亡は、農民的生活の可能性を失ったグリゴリーが、「クバン」という想像的なコサックの領域への逃避に望みを賭けたものだといえる。

彼らは馬に乗って集落を出発し、グリゴリーは、不慣れた騎馬をなんとかこなしたアクシーニヤのことを「ああ、お前はコサック女だ！ (Эх ты, казачка!)」と言って褒める(8:17;4:361)。しかしその

夜、食糧徴発隊に見つかり、逃走を試みるもアクシーニヤは撃たれて死んでしまった。平松は、ここまでのテキストにおいてコサックの女性がもっぱら баба で表され、казачка の語はほとんど使われていなかったことを指摘し、次のように述べる。「『コサック女性(казачка)』という語、そして馬に乗り撃たれ死ぬ女という、テキストにほとんど現れない要素を付与されたこのシーンのアクシーニヤは、戦線にある反革命的コサック男性のような死を迎えている」。このように例外的なアクシーニヤの死は、二重の意味を持つといえるだろう。一つには、グリゴリーはまたしても、英雄的な死の機会を奪われたということである。アクシーニヤが「コサック女」となって戦場に参入することで、グリゴリーを庇うようにして「戦死」してしまったからだ。さらにもう一つ、この死はグリゴリーから、〈コサック・ヒーロー〉のアイデンティティを維持できる限界点である「神話」的な「クバン」に逃げ込む可能性を奪うことにもなった。このとき、グリゴリーは戦争、集落、さらには「神話」的領域からも放逐されて、彼が新たな生活を営んでいく可能性はすべて閉ざされてしまった。「今や彼には急ぐ意味はなかった。すべては終わったのだ」(8:17;4:361)。

6.4. 解体される〈コサック・ヒーロー〉

しかしながら、それでもグリゴリーは生存し続ける。

彼は自分の心にとって大事なものをすべて失った。[……]しかし彼自身は依然として痙攣的に大地にしがみついていた。実際には壊れてしまった彼の生が、彼と他の人々にとって何らかの価値をもたらすかのように……。 (8:18;4:361)

彼は、なぜここまで生かされ続けてきたのだろうか。そして、グリゴリーの運命＝小説の結末はどのような意味を持つのだろうか。本論の最後にこの問いを検討しよう。アクシーニヤを失ったグリゴリーは、行き場のなくなったエネルギーを放出するかのように放浪する。彼は四日目に馬を捨てて森へと入った。森に入って五日目に、顔見知りの脱走兵と偶然出会い、彼らの小屋に身を置くことになった。そこで彼は無為な数か月間を過ごしたが、冬になると夜ごとの郷愁に耐えることができなくなった。「もう一度だけ生まれ故郷を歩き回り、子供たちに自分の姿を見せたら (покрасоваться на детишек)、もう死んでもいい (можно бы и помирать)」(8:18;4:362)という思いに繰り返し襲われた彼は、集落へ戻ることを決意する。仲間からはメーデーの恩赦を待つように勧められたが、彼はそれを固辞して出発した。

翌朝、グリゴリーは集落の対岸へと帰り着くと、「水の中に小銃とナガン拳銃を捨て (бросил в воду винтовку, наган)」(8:18;4:363)、川を渡って「大股で (крупно) 家へと歩きだした」(8:18;4:364)。そして、家の前に息子のミシャートカを見つけると、彼を呼び寄せて抱きしめた。ミシャートカから

娘のポーリュシカが亡くなったことが明かされるのだが、「ともあれ、グリゴリーが眠れぬ夜ごとに夢見ていた小さなことは実現したのだ」(8:18;4:364)。

これが彼の人生に残されたすべてであり、今のところ彼を大地と、そして冷たい太陽のもとで輝く巨大な世界全体と結びつけているすべてであった。(8:18;4:364)

これが『静かなドン』の結末である。グリゴリーは、彼にとって最後のコサック的持ち物である馬と銃を捨てて、子供に会いに行く。恩赦も待たずに出発し、「大股で」集落へと入っていく彼には、すでに逮捕や処刑という現実の危険は意味をなさないようだ。グリゴリーは肉体的に生き続けているが、ミシャートカを抱きしめた彼には、もうそれ以上の望みはなくなった。

先に分析したように、グリゴリーは「コサック神話」における肯定的主人公の資質を持った〈コサック・ヒーロー〉であった。彼のこれまでの「戦士」としての傑出性と、彼が抱えてきた葛藤の深さは、そのことを証明している。しかし、彼に用意された運命は〈コサック・ヒーロー〉にふさわしい英雄的戦死という「神話」の再演ではなかった。コサックたちが抱えた矛盾を背負いながら英雄的に戦ったにもかかわらず、最終的に現実的にも「神話」上も行き場を失ったグリゴリーは、生きながらにして馬と銃——彼に残った最後のコサック性——を放棄し、「死んでもいい」存在になった。これがグリゴリーの運命であり、それが意味するのは、ロシア文学が紡いできた「コサック神話」的人物像の解体、〈コサック・ヒーロー〉の「死」である。

結論

本稿は『静かなドン』を、特殊な社会集団であるコサックが第一次世界大戦とロシア革命、そして内戦に翻弄され、彼らの生活様式が破壊されていく過程を描いた歴史小説であると同時に、「コサック神話」という文学的イメージの解体が描かれた作品としても位置づけてきた。つまり、『静かなドン』を二重の意味でのコサック解体が描かれる物語として読み解いてきたのである。そして、この二重の解体は、相互に複雑に絡み合いながら進行し、小説全体を貫くテーマとなっていた。

『静かなドン』では、はじめから従来の「コサック神話」が多様な仕方で改変されていた。コサック集団に対する否定的な描写の多さや、〈コサック・ヒーロー〉像を戯画化した人物であるチュバートイやパンテレイの存在は、ショーロホフによる「コサック神話」の意図的な再解釈を象徴している。しかし、一方で「集落の一番端にある」メレホフ家の次男グリゴリーは、小説中で唯一「コサック神話」の伝統を継承する主人公、すなわち〈コサック・ヒーロー〉の資格をもつ存在として描かれていた。しかしグリゴリーは、ゴーゴリが描いた「神話」的コサックたちのように英雄的に戦いながらも、崇高な死による栄光を得ることはできなかった。彼はコサック集団を代表するかのように政治的な動

揺を経験し、最終的には行き詰まりに直面する。傑出した〈コサック・ヒーロー〉でありながら、彼がコサック集団の終焉を象徴する存在となっていくことは皮肉でもある。

コサックたちの戦場での敗退がグリゴリーによって象徴されるのに対し、コサック共同体の荒廃は、メレホフ家の崩壊を通じて描かれる。戦争の進展に伴い、メレホフ家は次々と死に見舞われ、家族としての連帯は失われていく。戦場と直接関係のないはずのナターリヤやダーリヤの死、パンテレイの無残な最期が描かれ、そしてミシカとドゥニャーシカの結婚の裏で孤独な死を迎えるイリーニチナは、コサック共同体の最終的な崩壊を象徴していると同時に、革命がもたらした新しい秩序の完成を暗示している。こうして、戦場でのコサックの敗北と、集落における革命の完成という二つの側面を通して、歴史的な意味でのコサックの解体は完遂されている。

しかしながら、コサック共同体が崩壊してもグリゴリー自身はなおも生き延び、個人的な運命へと向かっていった。赤軍勤務を終えて故郷に戻った彼は、故郷での農民的な生活を夢見るものの、反乱軍の指揮官としての過去、すなわち彼の革命への罪は重く、現実世界にはもはや彼の居場所はなかった。逮捕の危険が迫る中、逃亡して一時的に団匪に身を寄せたグリゴリーは、最後にアクシーニヤとともに「クバン」という「コサック神話」的空間への逃避を試みた。しかし彼女の死によってその望みも絶たれてしまう。

グリゴリーは、現実世界でも「コサック神話」の中でも行き場を失い、ついには馬と銃を捨てることで〈コサック・ヒーロー〉であることを放棄するに至る。この結末は、現実にはコサックが存在でなくなった時代に、多数の改変を被りつつもグリゴリーにおいて温存されていた「コサック神話」という文学的イメージの、最終的な解体を象徴している。

以上が「コサック神話」概念の導入を通して本稿が提示する『静かなドン』の解釈であるが、これを踏まえて最後に考察したい問題がある。それは、ショーロホフが、「コサック神話」の解体を描くことを通して提示したものは何なのかという問題である。例えば、本稿が依拠してきたコーンブラットは、『静かなドン』は「コサック神話」の力をボリシェヴィキに明け渡すための物語なのだという解釈を示している。⁶⁹ 確かに、『静かなドン』はコサック集団の荒廃とボリシェヴィキによる革命の完成を描いている。しかしながら、小説が最後に語ったのは、新しい時代を象徴するボリシェヴィキの英雄の誕生ではなく、〈コサック・ヒーロー〉の解体であった。グリゴリーが最後まで維持した「コサック神話」の力は、別の勢力に移されるのではなく、馬と銃の放棄という象徴的な仕方で剥ぎ取られ、失われているように思える。

⁶⁹ コーンブラットによれば、「[……]『静かなドン』は、コサックという民族の終焉を記録する以上のことをしている。それは 19 世紀文学から受け継いだ神話を操作し、その結果、伝統的なコサックのトポスは最終的にボリシェヴィキの方に移され、そのことによって、「彼は英雄たちを異なる名の下で不朽のものにした」。Komblatt, *The Cossack Hero in Russian Literature*, pp. 161-162.

それでは、ソビエト批評界はこの結末をどう解釈したのだろうか。第1章で見たように、『静かなドン』の結末は大論争を巻き起こしたが、その原因は、小説において革命の完成という肯定的な事実が語られながら、同時にそれが革命に同一化できないグリゴリーへの同情を喚起する悲劇として描かれているように見えた、という点にあった。例えば以下は、エメリヤノフが当時の主流であった「離反」論者たちを批判する文脈で書いた文章であるが、1940年当時、グリゴリーの結末の芸術的な力強さがいかに批評家たちを苦しめたかが伝わってくる。

批評家たちの意見によれば、まさにここ[＝『静かなドン』の第8部]で悪魔的な欺瞞が行なわれている。ショーロホフを翻弄した危険な才能は、語るも恐ろしいことながら、グリゴリーが、以前の英雄的な風貌を失って反徒に変貌したその時に、読者を駆ってほとんどグリゴリーへの同情を起させるのである。⁷⁰

革命という偉業の完成を、同情を禁じ得ない悲劇として描く。ここに批評家たちを大いに悩ませたショーロホフの分裂した立場がある。

平松によれば、この問題に対する批評家たちの議論は一応の決着をみたという。最終的に提示された解釈は、グリゴリーは仇敵ミシカ・コシェヴォーイに現れるソビエトの公式史観、「鉄の合法則性」によって放逐されたのだというものである。

コシェヴォーイに現れる「鉄の合法則性」を貫徹させ、グリゴリーに「最大限の圧力」をかけ、そのエネルギーを残らず放出させること、そのような「重なり合い」によって、ただ単に消尽されるだけでいかなる体制の「最大抵抗路線」にも回収されることのないエネルギーから、「感情」のエネルギー、芸術性が生まれる。それは[……]政治的＝非芸術的な図式主義の徹底が芸術を可能にするということだ。⁷¹

この論理は確かに、社会主義リアリズムの規範から逸脱するように見えた『静かなドン』という作品のイデオロギー的な正しさと、その芸術的な価値を両立させ、ショーロホフの分裂した立場を調和することに成功したように見える。しかし、「鉄の合法則性」を貫徹すること、すなわちグリゴリーを革命から最終的に放逐することと、グリゴリーの形象が解体されるという象徴的な結末は、矛盾しないとしても、論理的には直結しないように思われる。

そこで、このソビエト批評界が示した解釈を、本稿の言葉に即して再解釈しながら考察しよう。ま

⁷⁰ エメリヤノフ／伊東訳『静かなドン』とその批評家たちについて、527頁。

⁷¹ 平松「寸断されたテキスト」、193頁。

ず、『静かなドン』の結末において、社会主義革命の「鉄の合法則性」が貫徹されているというのは正しいだろう。ショーロホフは革命の完成を描くとともに、そこに同一化できないグリゴリーを容赦なく放逐したからだ。続けてソビエト批評界は、貫徹される「鉄の合法則性」がグリゴリーに圧力をかけ、「そのエネルギーを残らず放出させ」、「感情」のエネルギー、芸術性を引き出したと論じている。しかし、グリゴリーを押しつぶしたのは、本当に「鉄の合法則性」という歴史的必然性だけだったのだろうか。グリゴリーのエネルギーの放出は、彼が馬と銃を捨て、コサックとしてのアイデンティティを喪失することによって完了している。本稿の立場では、それは小説全体を貫く「コサック神話」の解体というテーマの完成を象徴するものであり、それはショーロホフの意識的な文学的営為の結果である。その意味で、グリゴリーの結末が持つ「感情」のエネルギー、芸術性は、「鉄の合法則性」そのものというより、文学的神話の脱自然化がもたらすエネルギーに由来するのではないか。そうであるならば、グリゴリーの解体の悲劇は、「鉄の合法則性」の単なる論理的帰結ではない。革命の正当性を肯定しつつ、それを悲劇として描くという行為は、ショーロホフの意識的な文学的選択であり、そこには彼の分裂した立場が確かに現れている。

しかし、ショーロホフは分裂した立場を提示することによってのみ小説を終わらせたのではない。本稿は、この分裂を調和する可能性が、最後に登場する息子のミシャートカに現れていると見る。グリゴリーの最後の願いは、集落へ戻り、子供に「自分の姿を誇示する(покрасоваться)」ことであった。彼が全てを失い、アイデンティティであったコサック性を捨てて「解体」されたとき、息子だけがグリゴリーを「大地と[……]世界全体と結びつけているすべて」として残ったのである。もちろん、その息子はもはやコサックではなくなっている。彼は今やボリシェヴィキのミシカ・コシェヴォーイの住む家に暮らし、革命後の新しい世界を生きる存在である。しかし、この結末は断絶だけを意味するのではない。ミシャートカは異質な容貌を持つコサックであったグリゴリーとそっくりな男の子、「メレホフの血(Мелеховские крови)」(7:8;4:54)を受け継ぐ存在として描かれており、この点において、彼はコサックの過去と社会主義の未来を架橋しうる存在として現れる。ミシャートカに流れる「メレホフの血」は、解体された「コサック神話」が完全に無意味になるのではなく、何らかの形で新しい時代に継承されていく可能性を示唆している。ミシャートカは、ショーロホフの分裂した立場相互間の緊張関係を象徴しつつ、同時にその調和の可能性を暗示している。

ショーロホフが描いた、社会主義革命の裏面としての二重に解体されるコサックの悲劇は、コサックの過去と新しい時代が調和される、わずかな可能性の暗示によって閉じられている。

(にしたに ゆうと)

«Казачий миф» и «Тихий Дон»: дважды разрушенное казачество

НИСИТАНИ Юто

В этой статье роман «Тихий Дон» (1928–1940) М. А. Шолохова (1905–1984) рассмотрен в контексте «казачьего мифа», существующего в русской литературе. Первая часть статьи раскрывает базовую информацию по теме исследования. Статья дает обзор интерпретаций, возникших после завершения работы над романом в 1940 году, и выявляет слабые стороны распространенных сегодня методов анализа. Далее рассмотрена концепция «казачьего мифа», впервые представленная Д. Корнблатт в монографии «Казачий герой в русской литературе» и обладающая важным потенциалом в поиске новых подходов к интерпретации романа Шолохова. В качестве предпосылки к анализу романа дается краткое описание ситуации «казачьего мифа» в русской литературе XIX века.

Вторая часть статьи посвящена подробному анализу «Тихого Дона». Главный герой романа Григорий определяется как единственный в произведении Шолохова «казачий герой», раскрывающий потенциал «казачьего мифа». Именно Григорий воплощает политические и социальные потрясения, с которыми столкнулись казаки на поле боя в годы Гражданской войны, в то время как другие члены семьи Мелеховых олицетворяют распад казачьего сообщества в этот исторический период. В заключительной главе второй части особая судьба Григория интерпретируется в рамках дезинтеграции мифа о «казачьем герое». В романе «Тихий Дон» казачество разрушается дважды: сначала как историческая реальность, а затем как литературный миф.